

択捉の白ヒグマ サケ捕り名人

気付かれにくく有利?

体色の白い個体が含まれる北方領土・択捉島のヒグマが、道東のヒグマに比べてはるかに多くサケ類を食べていることが、総合地球環境学研究所(京都市)の松林順・センター研究推進支援員(北大出身)らの研究で分かった。「白いヒグマ」がなぜ存在するかの解明につながる可能性があるといふ。

松林さんは、北大植物園・博物館にある択捉島のヒグマの頭骨標本(1920年~45年)を安定同位体分析という手法で調べた。この結果、食物全体に占めるサケ類の割合が27・3%と、道東のヒグマの8・2%を大きく上回っていた。

一方、先行する研究で、やはり白い個体が発見されているカナダ・ブリティッシュコロナビア州のアメリカクロクマで、白い個体は

サケに発見されにくく、黒い個体に比べて田中にサケ類を多く捕つ受け継がれてきたと考えられる。異なる体色の個体が混在する中で、白いヒグマは田中、暗色のヒグマは夜にサケ類を捕るといひ、「論文はロハズン・コンペ協会の学術誌「Biological Journal of the Linnean Society」に掲載された。

白いヒグマは2000年の年10月、北方領土¹がなし文化交流の専門家などで国後島を訪れていた自然生態系の専門家の訪問団が撮影に成功した。世界でも国後、択捉両島にしか生息していないとされ、全体の1割程度が白いという。松前藩家老で画人の蠣崎波響が描いた「夷酋列像」にも白い子グマの姿が見られる。



カラフトマスを捕る白いヒグマ
=2010年9月、国後島オン
ネベツ川(NPO法人北の海の
動物センター提供)